「日本秘湯を守る会」創立40周年特集　特別座談会

温泉文化と自然を守る！

日本秘湯を守る会（佐藤好億会長、179会員）が今年、創立40周年の節目を迎える。規模は小さいながらも日本の温泉文化に確固たる地位を築き、多くのファンを持つ。12月には創立の地、東京・上野で記念式典を開催し、次のステージへ新たなスタートを切る。佐藤会長をはじめ、地域で活躍する会員の方々にお集まりいただき、秘湯を守る会への思いを語っていただいた。（東京・浜松町の朝日旅行本社で）

969年創業、会発起人の一人
鶴の湯継承、勉強を兼ねて
8年入会、進むべき道学ぶ
跡取り、父の勧めで入会を
13年入会、同じ悩みを共有
江戸後期創業、叱咤に感激
61年家業に、〝秘湯〟を実感

佐藤好氏　佐藤和氏　坂本氏　平瀬氏　武石氏　遠藤淳氏　遠藤哲氏

入会の時期、動機
自館の特徴

――入会時期やその動機、旅館の特徴などをお聞かせ下さい。

佐藤好　私は会立ち上げ時の発起人の1人。昭和50年4月2日、上野の精養軒で33人の仲間と始めたが、いまは179軒まで増えた。会と共に約40年やってきた。「大丸あすなろ荘」は安和2年（969年）創業と古い。昭和39年の大雪で一部損壊し、解体。新築した宿に高松宮様に「あすなろ荘」と命名していただき、現在に至っている。山の宿を次の世代にどうやって残していくかに腐心しています。

佐藤和　昭和56年、乳頭温泉の一番古い温泉旅館「鶴の湯温泉」を引き継いだ。他施設との接触がない中でこの会の存在を知り、勉強の意味で入会しました。同じ志のメンバーと話をすることで、自信が生まれた。それが一番印象的です。

坂本　埼玉・柴原温泉で「かやの家」という客室13の旅館を経営しています。平成8年の入会。ある日、家内が留守番をしていた時に変なおじいさんが来てお風呂の写真等を撮っていたそうです。それが岩木一三三会長（当時）だった。数日後に電話があり「会の理事会をお宅でやりたい」という。その後お誘いをいただき入会しました。岩木会長はじめ、素晴らしい人が多く、自分が進むべき道を教えていただいたような気がします。

佐藤好　いわゆる入会審査を兼ねた理事会ですね（笑い）。

平瀬　横浜出身で、平成5年に跡取りとして入りました。結婚当時、父がよく言ったのは「秘湯の会の仲間と交流しろ」ということ。勉強をさせていただく中で、秘湯の会らしい宿作りができてきたのかなと思います。当館は温泉に非常に特徴があり、南アルプスの麓にあるにも関わらず、塩水が出てくる。煮炊きして製塩ができてしまうほどです。地質学的には、どんなに少なく見積もっても、2万年前の太古の塩水がプレートによって運ばれてきて、それがいまになって信州の地に湧き出ているようです。まさしく館名「山塩館」通りです（笑い）。

武石　平成13（2001）年に両親が入会しています。4年前にこの地へ帰ってきて若女将として働いています。会の女将研修会にも行かせてもらっていますが、とても勉強になります。家族的な雰囲気でいろんなことが相談でき、同じような悩みも抱えており「自分だけじゃないんだ」と勇気づけられもしました。「寒の地獄旅館」という名前に特徴があります。14度の冷鉱泉が地下に自噴しており、そこに水着を着て入っていただくという、昔ながらの方法をとっています。江戸末期の嘉永2（1849）年開湯、昭和3年に旅館を創業しましたが、浴槽の上にお薬師さんが3体祀ってあり、うち1体の横には安政4年奉納というのが残っています。おそらくその頃から浴場があったのではないかと思います。

遠藤淳　福島の高湯温泉の「吾妻屋」です。江戸後期創業という文献が残っています。忘れもしません。平成10年の秋、某大手旅行会社の人が来て「いま旅館を絞っており、申し訳ないが旅連を退会してくれ」といわれました。どうしようかなと思っていたところ、周囲を見渡すと秘湯を守る会の方がいっぱいいた。平成11年4月30日、岩木会長といまの佐藤会長がうちに来ていろんなお話しをしてくれ、ずいぶん怒られた（笑い）。ただ、これだけ真剣に言ってくれる人がほかにいるだろうかと思い、ついていこうと入会を決めた。私的には宿の創業は11年4月30日です。入会していなければ今の吾妻屋はなかったと思います。岩木先生とお話できたのが財産です。

遠藤哲　山形県米沢市、標高1300㍍の地で旅館「桝形屋」をやっています。家業に入ったのが昭和61年ですが、既に会員でした。父は岩木先生に誘われたのが、生涯の光栄だと言っています。私が研修会に出たのが平成6年頃で、腹を割って夜中まで酒飲みする会もないなと思いました（笑い）。いまでは秘湯という言葉はうちのためにあるんじゃないかと思うぐらい、会にずっぽりとはまっています。

――まさしく「岩木イズム」というか、「岩木学校」ですね。

佐藤好　私の人生そのものが多分、岩木学校の延長ですね。岩木さんを「オヤジ」と呼ばせていただきますが、10年先、20年先の先読みができる、唯一の「旅の哲学者」です。目線が全部、旅人の目線でしたよ。少なくとも朝日旅行会（現朝日旅行）の社長としての目線ではなかった。同時に金儲けのための宿屋という発想はなかった。そこにものすごく惹かれた。

佐藤和　私が入ったのが58年。岩木さんもお元気で、ガンガン怒られた（笑い）。逃げ出したくなるほどだが、あれだけ怒られたら、逆に負けてたまるかというものが出てくる。そのうち、何かうれしくて、もっと怒ってもらいたいと思うから不思議。後でちゃんと生きてくるんですね。

佐藤好　利益追求型の会ではない。サービス業というのは数字では拾えきれない部分があり、そこが面白さでもある。そこを若い人にも伝えていきたいなと思う。

坂本　岩木会長は「必要以上に儲けたがるな」と言っていたという話を聞いたことがあります。儲けよう儲けようと思っていると、それが宿に出てしまう。その点、秘湯の宿は、いい雰囲気のお宿さんが多い。近代的でなくても、魅力ある人がやっている宿は何となく味がありますね。

平瀬　岩木会長が言うのは旅館経営云々よりも、お迎えする気持ちの問題、着飾ったようなおもてなしではなくて、地方ならではの独自性の中で、もてなしなさいということ。豪華な料理よりも、おいしい漬物を食べさせてほしいとか…。心をギュッとつかむような内容のことをおっしゃっていたのが印象に残っています。

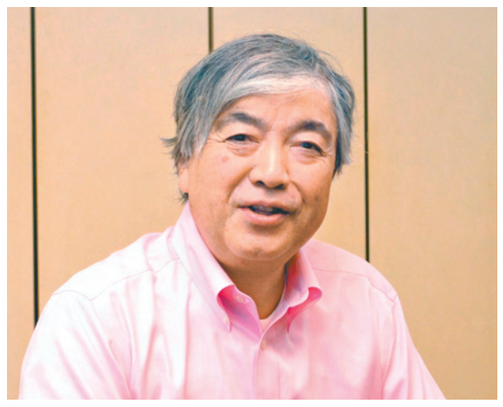
武石　会は全国組織であり、それぞれ価値観も違うし、地域事情もある。しかし、会員全員が同じ方向、同じベクトルを向いて歩いている。岩木会長時代を知らない世代だが、その教えが生きていると感じます。

遠藤淳　岩木会長が来るというので自動販売機を隠したりしたのだが、全てお見通しだった。「いいところに住んでるじゃないか」「いい車乗ってるじゃないか」とか指摘され、「やっぱりお客さまに尽くすのが今は一番じゃないのか」ともたしなめられた。決して褒める人ではないですが、頑張った時には「よく頑張ったな」と言ってくれる。岩木会長に入ってもらいたい一心で岩風呂も作りました（笑い）。

遠藤哲　「親戚づきあいができる会」っていう人もいるが、まさしくその通り。岩木会長は全会員の玄関先に立たれているし、我々もかなりの数の旅館さんに足を運び、女将さんらと話している。家族の中身まで、ある程度分かっている。その上でのお付き合いをしています。

佐藤和志氏

坂本　譲氏


遠藤淳一氏

佐藤好億氏

会の存在と
地熱問題

――旅館業界において、秘湯を守る会というのはどんな存在でしょう。

佐藤好　全旅連が求めているような方向性でもなく、観光庁が求めているような中身でもないでしょう。だからこそ意味がある。「心」を基準にして、次代につないでいかなきゃいけないという組織はおそらくこの会以外なく、今後とも出てこないでしょう。

――入会基準は。

佐藤好　あるようでないんです。岩木先生の片想いで選んだ宿もあるし、私が勝手に選んだ宿もある。「この旅館を助けないと地域全体が消えてしまう」というところを入れたケースも結構ある。

――温泉、あるいは秘湯に対する外国人の関心が強まりそうです。

佐藤和　リゾートの根底にある非日常というのは、湯治場そのものであり、世界に誇れる生活空間だと思う。ただ、昔でいう湯治場はなくなってしまった。ではどう湯治場の雰囲気を伝えるか。山奥なら山奥、川の側だったら川の側に合う生き方をすることが大事です。それが外国人に来てもらえる一番の要素でないのかなと思います。

平瀬　「ありのまま」を感じ取っていただければ。日本人になった気持ちで体験してもらう。塩作りとかね（笑い）。

武石　衣食住ともに過ごす空間が宿なので、それをやっぱり味わっていただきたい。姉が外国語に堪能なので助かっています。女将さんはジェスチャーですが、ちゃんと通じ合っている。これはすごいです（笑い）。

遠藤淳　昔から個人旅行のお客さまがちょこちょこ来ています。経営する上で、インバウンドに頼る部分も出てくると思う。しかし、東北全体もそうですが、特に福島はインはなかなか厳しい。時間がかかるでしょうね。原発も将来観光地になるだろうという人もいますが、どれだけの時間がかかることやら。

遠藤哲　香港や台湾の方が年に何組か来るぐらいですね。受け入れの準備をしておくことは必要ですが、いまは自分の宿、環境を守って、いいものをとにかく残しておくことが大事だと思います。

――佐藤会長は地熱問題に精力を傾けていますが、危機感はやはり強いですか。

佐藤好　「温泉」というものがなくなれば、地方の限界集落は全部消えてしまう。地熱開発によって温泉が消えれば村そのものがなくなってしまう。

坂本　特に何もできないので、あるがままの姿を提供します。無理はしない。

武石　衣食住ともに過ごす空間が宿なので、昔から天上の幸せを感じた夢中になっていた。山を歩き、渓谷をさかのぼり、峠を越えて山村から山里へと歩くことをこの上ない嬉びとしていた。そんな折、歩いて歩いて、やっとたどり着いた山あいや、渓谷の奥に、忘れられたような湯宿を見い出した時の安堵感は格別なものであった。

ランプの灯る宿ならさて、山菜と岩魚の料理に、私たちは山の湯宿の一夜を楽しみ、翌日は会津二岐山に登って須賀川へ抜けた。大丸旅館は大丸あすなろ荘として発展しているが、なつかしい山宿の一つである。

昭和30年代、40年代頃までは、歩かなければたどり着けない山の湯宿はかなりたくさんあった。自家発電があれば最高、ランプ、カーバイトを灯す宿などもあった。山のいで湯や一軒宿を私はこよなく好んだ。そうした宿の横のつながりいである「日本秘湯を守る会」、昔の懐かしさをいまでも変わりなく提供してくれている。

観光開発が進み、時代の流れと共に、歩かなければ行けなかった山奥へも車が入るようになり、いつ倒れてしまうかと心配された宿も増改築がほどこされ、秘湯という名の名観光旅館へ変わっていったところもある。

一方、依然として昔の姿をとどめ、こまやかな人情も変わることなく、旅人をあたたかく迎えてくれる本当の意味での秘湯も数多く残っている。代替わりしてもそうした人の心だけは変わりなく受け継がれていってほしいものである。

秘湯の会よ、永遠なれ、と願う。

祝　日本秘湯を守る会創立40周年

秘湯の会よ、永遠なれ

―旅行作家の会代表・野口冬人

〝限界集落〟を守る会の活動　佐藤好氏
置かれた環境で生きてこそ　佐藤和氏
自然体で対応、無理しない　坂本氏
外国人にもありのままの姿　平瀬氏
衣食住共に過ごす空間提供　武石氏
地熱開発は地元の合意必要　遠藤淳氏
〝いいもの〟をとにかく残す　遠藤哲氏

「日本秘湯を守る会」創立40周年特集　特別座談会

40周年機に誓い新たに

出席者（順不同）

佐藤　好億氏　日本秘湯を守る会会長 大丸あすなろ荘社長（福島県天栄村）
佐藤　和志氏　鶴の湯温泉社長（秋田県仙北市）
遠藤　哲也氏　桝形屋社長（山形県米沢市）
遠藤　淳一氏　吾妻屋社長（福島県福島市）
坂本　譲　氏　かやの家社長（埼玉県秩父市）
平瀬　定雄氏　山塩館社長（長野県大鹿村）
武石　悠佳氏　寒の地獄旅館（大分県九重町）
司会・観光経済新聞社編集長内井高弘

次の40年　守る会の姿は

耐えることの大切さが大事
成功、失敗の事例を伝える　佐藤好氏
秘湯は人なりの信念大事に　坂本氏
会の〝本質〟と理解を深める　平瀬氏
お客さまの心のよりどころ　武石氏
「スタンプ帳」継続していく　遠藤淳氏
〝原点〟に帰る第一歩にする　遠藤哲氏

――会は今年40周年を迎えます。次の40年に向け、どう歩んでいくのでしょう。

佐藤和　秘湯の会も世代交代が進んでいる。若い人に成功事例だけでなくて、失敗事例も含めてちゃんと伝えていく必要があるだろう。

坂本　損得ではなく、「秘湯は人なり」という信念を大事にしていくこと。

平瀬　お客さまとの結び付きがとても強い。例えば、お客さまから「武石さんとこの悠佳ちゃんがこんなことしてたよ」と聞いたりする（笑い）。そんな会ってないですよね。それは絶対に崩しちゃいけない。自分たちが会の本質、理解をもっと深めていかないと50年、60年後はない。お客さまに「次、秘湯の会に行くにはどこに行ったらいいですか」と聞いてもらえるような宿になればと思います。

武石　我々、そしてお客さまの心のよりどころでありたいなと思います。関係者がベクトルを同じにし、納得して一つの方向に行けるような関係づくりを目指したい。

遠藤淳　旅というものはいつまでたってもアナログなんですよね。その中で、岩木イズムじゃないが「旅は情け、秘湯は人なり」という部分はこれからも継承していかなければいけない。また、お客さまとのつながりである「スタンプ帳」を継続していくこと。

遠藤哲　人口減の荒波は秘湯の会も絶対にかぶってくる。会員の皆さんが「何であのボロ家で稼げるのか」という部分を感じていただければと思う。インターネットもパソコンもあえて手を触れないが、やらないことで見えてくるものもある。いろいろな生き方があるんだっていうのを会員の皆さんに分かってもらえるだけで、私の存在価値かな、という気がする（笑い）。

佐藤好　40周年を機に会長を降ります。去っていくものが次の世代のことをいうのもどうなのかとは思うが、この40年間、やってきた。しかし、マイナスだと思っていない。女房には申し訳ないけど（笑い）。厳しい社会状況の中でこの会を見直していただいて、戦略も含めてですね、40周年を機に、したたかに、かつ誇りを持ってスタートしてほしいですね。

――時代も変わり、旅もインターネットの中で作られるようになってきました。

佐藤好　ネット社会の中で、どう日本秘湯を守る会が挑戦できるか。単独のウェブを立ち上げるなど手を打っている。

――会員としての意気込みをお聞きしたい。

遠藤哲　会に貢献したいというより、これからもお付き合いしてくださいということ（笑い）。大好きな会なので、存続、発展に向けお役にたてればと思う。

遠藤淳　皆さんに迷惑をかけないで（笑い）、代々受け継がれた商売を堅実にやっていく。会の家族的雰囲気を大事にし、次につなげていければ。

武石　皆さんに支えられている面が多いので、自立するよう力をつけていきたいなと思います。

平瀬　お客さまと一緒に喜んだり悲しんだりできるような宿作りを、そして会については中間世代としての役割もきちんと果たせるよう、自覚を持って臨みたい。

坂本　本当にお世話になるばっかりで。お客さまに秘湯の宿の良さを誠心誠意お伝えするとともに、若い世代の人にも会の精神を伝えていきたいと思います。

佐藤和　うちの建物が一番ボロいと思うが、会員の皆さんが「何であのボロ家で稼げるのか」という部分を感じていただければと思う。インターネットもパソコンもあえて手を触れないが、やらないことで見えてくるものもある。いろいろな生き方があるんだっていうのを会員の皆さんに分かってもらえるだけで、私の存在価値かな、という気がする（笑い）。

佐藤好　40周年を機に会長を降ります。去っていくものが次の世代のことをいうのもどうなのかとは思うが、この40年間、北海道から九州までの会員のもとに足を運ばせていただいた。その中から分かったことはトップに立つ人間は玄関先に立ってあげるということ。それがないと秘湯を守る会の真髄って語れない。179軒全部違う。違ったからこそ、目的の旅先の宿として選べる、あるいは選んでいただける内容がそこにある。また、耐えることがやはり、次の世代の一番の眼目にないといけない。そうでないと、不便さとか、自然環境の厳しさとか、そういうところが守りきれないのではないか。旅館業界の中で、これだけ特異性のある会はほかにはない。インバウンドもひっくるめて、旅行者から選ばれる会だと自負している。ぜひそこに心を集中していただくことが、次の40年間を支える唯一の起爆剤になるのかなと、そんな風に思っています。

――遠藤さんは対策委員長ですね。

遠藤淳　国は耳触りのいい言葉を並べて開発の気運を盛り上げている。地域住民が、全く状況が分からないまま勝手に進められており、そこが一番駄目なところだと思う。環境省のガイドラインにもあるように、協議会を作って、1次調査の対象から合意形成をするという基本的なことをしっかりとやってもらう。無理な要望ではない。

佐藤好　地球環境全体の中で、例えば温泉はどうあるべきなのかってことが問われて然るべきだし、同時にその中では全ての生物が共生していかなければならない。自然に対する思い上がりは許されない。日本秘湯を守る会は限界集落を国からお預かりしているようなもの。その国が集落をなくすようなエネルギー政策をとっていいのだろうか？

湯治文化イコール温泉文化であり、そのこと自体が地方文化なんですね。その文化に対し、日本秘湯を守る会が貢献できるのであれば、そこにすべての命をかけても惜しくはないと思っている。

遠藤哲也氏

平瀬定雄氏

武石悠佳氏

祝　日本秘湯を守る会創立40周年

会と「自立と協働」の精神

―朝日旅行社長・井沢　啓

日本秘湯を守る会創立40周年、誠におめでとうございます。

1975（昭和50）年4月に、上野精養軒で33軒の山の宿が集い、奥深い山の中にある温泉宿や失われてはいけない自然環境、そして、そこで育まれる地域の文化を守ろうと結成されたのが「日本秘湯を守る会」であると聞いています。朝日旅行も同会の創立当初より最大の事業パートナーとして、お互いの発展のために常に連携してまいりました。

結成当時は、温泉地で大量消費型の宴会旅行の形態が主流であり、山の中の湯治場的な温泉地は旅人にはやや忘れられた感がありました。

その後、82～87（昭和57～63）年頃に起こった秘湯ブームや露天風呂ブームが追い風になり、秘湯（人里離れた山の中の小さな湯治場的温泉地）がテレビ等のマスコミでも取り上げられるようになると、当社のツアー企画でも、中高年を対象とした登山やハイキングで秘湯に宿泊するコースが盛況を迎えることとなりました。

現在では、秘湯の宿も179軒と数を増やし、全国規模の大きな組織となりました。事業の一つであるスタンプ10個で1泊招待の事業も年間招待者数1万5千人を超えるまでに成長して、スタンプ帳は約15万冊発行されています。朝日旅行の取扱人数（招待客を含む）も、年間3万人ほどになっています。

いまや「秘湯」はブランド化し、自然志向と本物志向のお客さまに認知されてきていると思います。しかしながら、時代と共に社会環境は激変し、少子高齢化、グローバル化、ネット販売の進展などの波が秘湯にも押し寄せています。社会環境の変化により、お客さまの旅に出る動機や旅に求める価値観も大きく変わってきています。

その環境の変化に対応して、会も「変えてはならないこと、変えなければならないこと」を明確にして、対処されていると認識しています。将来に向けて、不十分なことを解決していくために、「次世代にいかに継承していくかが最大の課題だ」と佐藤会長が表明されていることは、重要なことだと思います。

その意味で、本年12月15日に創立の地である上野精養軒で40周年記念式典が「継承と共創」をテーマに開催されることは、意義深いことだと思います。

朝日旅行も2009（平成21）年よりJTBグループの一員となり「交流文化事業」の一翼を担うミッションで再スタートしています。朝日旅行の企業理念である「旅文化の創造」を目指し、日本秘湯を守る会と「自立と協働」の精神で、連携して、日本の旅文化（温泉文化）を世界に発信できればと考えています。最後になりますが、日本秘湯を守る会のますの発展を祈念いたしまして、創立40周年記念のお祝いの言葉とさせていただきます。

日本秘湯を守る会

「日本秘湯を守る会」

北海道	丸駒温泉
	銀婚湯
	大雪高原山荘
	湧駒荘
	芽登温泉
	鯉川温泉旅館
	新見本館
	知内温泉旅館
青森県	猿倉温泉
秋田県	鷹の湯温泉
	樅峰苑
	岩倉温泉
	鶴の湯温泉
	別館山の宿
	ふけの湯
	杣温泉旅館
	奥山旅館
	阿部旅館
岩手県	石塚旅館
	彩雲荘
	松楓荘
	峡雲荘
	須川高原温泉
	元湯夏油
宮城県	鬼々温泉
	湯元不忘閣
宮城県	最上屋旅館
	温湯温泉佐藤旅館（休業中）
	名湯・秘湯うなぎ湯の宿琢琇
山形県	湯どの庵
	まいづるや
	丸屋
	湯宿元河原湯
	湯ノ沢間欠泉　湯の華
	吾妻屋旅館
	宗川旅館
	福島屋
	桝形屋
	滝見屋
	東屋旅館
	西屋
	能登屋旅館
	湯守の宿　三之亟
新潟県	鷹の巣館
	清廣館
	嵐渓荘
	樺太館
	駒の湯山荘
	自在館
	貝掛温泉
	大沢館
	清津館
新潟県	川津屋
	松之山温泉凌雲閣
	白馬岳蓮華温泉ロッジ
	笹倉温泉龍雲荘
	雨飾山荘
福島県	川上温泉
	好山荘
	相模屋
	鷲倉温泉高原旅館
	吉倉屋
	水戸屋
	御宿万葉亭
	住吉館
	旅館二階堂
	旅館ひげの家
	吾妻屋
	仙峡閣
	大丸あすなろ荘
	樵山荘
	旅館大黒屋
	恵比寿屋
	滝の湯
	井筒屋
	旅館末廣
	旅館ひのえまた
	かぎや旅館
福島県	ゆもとや
	米澤屋
	喜楽苑
栃木県	大丸温泉旅館
	やまの宿下藤屋
	渓雲閣
	大出館
	平の高房
	八丁湯
	川俣一柳閣
	御宿こまゆみの里
茨城県	湯の澤鉱泉
群馬県	法師温泉長寿館
	神水館
	清流荘
	関晴館
	まるほん旅館
	美郷館
	かど半旅館
	紅葉館
	滝沢館
	梅田屋旅館
埼玉県	かやの家
千葉県	林景荘
東京都	たから荘
神奈川県	蒼の山荘
山梨県	雲峰荘
	山和荘
	赤石温泉
	源氏の湯
	白根館
静岡県	山あいの宿　うえだ
	湯本館
	福田家
	かわいいお宿　雲見園
	山芳園
長野県	本沢温泉
	唐沢鉱泉
	初谷温泉
	高峰温泉
	岩屋館
	和泉屋旅館
	おもとや旅館
	岩の湯
	旅館わらび野
	満山荘
	七味温泉渓山亭
	後楽館
	雪あかり
	薬師平茜宿
	仙人閣
	山田旅館
長野県	中の湯温泉旅館
	坂巻温泉旅館
	神嶽の湯　みたけ荘
	富喜の湯
	小梨の湯笹屋
	中房温泉
	神乃湯
	湯元山塩館
	大喜泉
	不動温泉　佐和屋
岐阜県	湯元　長座
	いろりの宿　かつら木の郷
	水明館佳留萱山荘
	槍見館
	野の花山荘
	谷旅館
	藤助の湯　ふじや
	湯元　すぎ嶋
	泉岳舘
	朝日荘
石川県	曲水苑
	にしやま旅館
	永井旅館
	山崎旅館
富山県	名剣温泉
	みくりが池温泉
福井県	虹岳島荘
奈良県	やど湯の里
奈良県	神湯荘
和歌山県	あづまや
	冨士屋
	下御殿
鳥取県	岩井屋
	海潮荘
徳島県	祖谷温泉
熊本県	垂玉温泉山口旅館
	新明館
	山河旅館
	奥阿蘇の宿　やまなみ
	親和苑
	湯楽亭
大分県	山の宿寒の地獄旅館
	旅館福元屋
	法華院温泉山荘
	喜安屋
長崎県	旅館國崎
鹿児島県	南洲館
	おりはし旅館
	みどり荘